

患者に尊厳を、社会に活力を



高校時代は「粒ぞろいの中で切磋琢磨した」と宇津木久仁子さん

000年(ころ)に「帽子クラブ」を立ち上げた。抗がん剤で髪の毛が抜けた患者さんに向けて、ボランティアスタッフが帽子の販売や手作り帽子の講習などを行っている。

手作りの帽子を病室に

1950年の高校再編で、共学になった山形東高校。以前は大半を男子生徒が占めていたが、今では女子生徒が半分近くまで増えてきた。

がん研有明病院(東京都江東区)婦人科副部長の宇津木久仁子さん(57、77年卒)が高校に入学したとき、270人中、女子はたったの10人。6クラスそれぞれに1、2人ずつ女子がいて、体育の授業では男子と一緒に柔道もやった。「男女とも素朴でまじめな生徒が多かった」

山形大学医学部に進学。同大医学部附属病院を経て94年から勤務するがん研有明病院では、2

大きくさん並べて、おしゃれを楽しむ患者さんを見たことがきっかけだった。「脱毛を一時的なものとして我慢するのはなく、治療中も今までの自分でいられるように、外見を整えることも大切なこと」と強く感じた。入院中は顔色を見るため通常は禁止されている化粧も、婦人科病棟内では認められるようにと奔走した。

「医師の前では一人の患者さんであっても、だれしも家や社会に戻れば尊敬されている人」だということを忘れずに、日々診療にあたっている。

ビジネスコンサルタントの皆川朋子さん(40、95年卒)が入学した年は女子が多く、3分の1ほどを占めた。2年生のときの文化祭「山東祭」では、先輩の応援団長とフオークダンスを踊りたいなど期待したものの、実現しなかったことも懐かしい思い出だ。

東京大学・大学院で応用化学を学び、日本IBMに就職。イギリスのケンブリッジ大学院に留学して経営学修士を取得し、帰国後は海外での新規事業立ち上げを支援するコンサルティング会社「アークイノベーション」で執行役員を務める。通常のコンサルティングと

いえば、今の事業をどう改善するかが中心だが、「新規事業の開発支援は、5〜6年先はどうなっていて、どのニーズがあるのか」という夢があつて楽しい」という。

一方で、NPO法人「二枚目の名刺」のメンバーとして、社会人とはほかのNPO団体をマッチングさせる活動もしている。本業である1枚目の名刺以外に、2枚目の名刺を持ってNPOで活躍する社会人が増えれば、より活力のある社会が実現すると思うからだ。私自身、活動を通じていろいろな業種の人に会えて、刺激になっている「



「大学受験の勉強は、塾に行かなくても学校がしっかりみてくれた」と皆川朋子さん